

『凜—RIN—』のピアノと 吉田美奈子が魅せた世界



8月24日、東京・丸の内COTTON CLUBで行なわれたECHO（吉田美奈子・安田美充央・石井彰）の公演。中央に立つ吉田を挟むように2台のピアノが設置され、向かって左側に石井、右側に安田が着席。安田作曲の「Las Vegas Rhapsody-Prologue」に始まり、全11曲が披露された

今年のはじめにブルクワレーベルから出した、安田美充央と石井彰のピアノデュオのアルバム『凜—RIN—』はさまざまなおもしろい反響があり、プロデューサーとしては嬉しい限りだったが、これを聴いて吉田美

奈子がこのピアノデュオに自身を加えたユニット、「ECHO」を結成してコンサートを行なうと聞いたときには、嬉しいを通り越して、驚いた。ピアノとヴォーカルのデュオなら枚挙に暇がないほどあるし、歌の伴奏なら1台のピアノで充分なはずなのになぜ、と思わないではいられなかったのだ。大体、ピアノを2台用意できるコンサート会場は限られているし、リハーサルだってスタジオを選ばなきゃいけない。この面倒は、アルバムをプロデュースした身としては痛いほどわかる。何を好き好んでと思えば、その謎を解くつもりで、2023年8月24日、コットンクラブに出かけた。

広大なランドスケープのなか、ときにはその風景と対峙して

答えは明確だった。吉田美奈子が狙ったのは、2台のピアノでオーケストラを編成し、それをバックに歌うというものだった。ピアノが歌に寄り添うのではなく、2台のピアノによって広大な音のランドスケープのなかで立つ、ときにはその風景と対峙するようにして歌唱する。

音のランドスケープは、ピアノが2台になることにより複雑さを増し、また、粒立ちが際立つピアノならではの音の見通しのよさによって、刻々と変幻自在に推移していくさまが明瞭に見て取れる。これは歌に寄り添い、歌を引き立てながら和音をつけて

いくような伴奏とはまったく異なったものだった。これまで飽きるほど聴いてきた、「ダニーボーイ」も「虹の彼方に」も実に鮮やかに魅り、僕は吉田美奈子の慧眼に舌を巻いた。

となると当然、アレンジ力がものを言う。圧巻だったのは、安田美充央による吉田美奈子の十八番「タウン」のアレンジだ。バンド編成のこの曲のオリジナル音源には、当然ドラム等も入っているわけだが、パーカッションな魅力を2台のピアノで表現したその手際は実に見事で、吉田美奈子をずっと聴き続けていたファンにとっても新鮮だったらしく、曲が終わるやいなや、この日一番の盛大な拍手が起きていた。（文中敬称略）



途中のMCで「プロジェクト名の『ECHO』は、共鳴し合うという意味から」と明かした吉田。スタンダード・ナンバーの「Danny Boy」「Over The Rainbow」「Send In The Clowns」などから、さらには吉田の「Starbow」「Town」までもが、ステージの三人の共鳴によりまったく新たな楽曲へと昇華。満杯の観客のブレスを奪った